**翻 訳**

# 『匿名のガル年代記』第三巻（翻訳と注釈）

［第1章から第12章まで］

荒 木 勝

以下の翻訳は、写本ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版を検討したカロル・マレチンスキ K. Maleczyński の校訂本を用いた（Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principum Polonorum［*Monumenta Poloniae Historica*, Nova series, Tomus II, Cracoviae 1952］）。

注釈に関しては、ビェロフスキ（A. Bielowski）、マチレンスキ、プレジア（M. Plezia）、グロデツキ（R. Grodecki）、ブイノッホ（J. Bujnoch）、シラフトフスキ・ケプケ（I. Szlachtowski, R. Koepke）に拠った。注釈においては、注釈者の見解をそれぞれに

Bielowski→［Bi］、Plezia→［P］、Grodecki→［G］、Bujnoch→［B］、Maleczyński→［M］、I. Szlachtowski, R. Koepke→［S］

と略記し、以下にその見解を紹介した。それ以外の注釈は訳者のものである。参照した翻訳は、グロデツキ訳をふまえたプレジアによるポーランド語訳 *Anonim tzw. Gall, Kronika Polska*, Kraków 1982［BIBLIOTEKA NARODOWA. Nr. 59］. ブイノッホのドイツ語訳 *Polens Anfänge, Gallus Anonymus, Chronik und Taten der Herzöge und Fürsten von Polen*. Verlag Stria, Graz-Wien-Köln 1978である。典拠については、聖書は、シュトットガルト版の *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* 1969（その翻訳は、とくにことわりがない限り、『合同訳聖書』日本聖書協会、1991年）に拠った。ギリシヤ・ラテンの古典については、*The Loeb Classical Library* に拠った。12～13世紀の東欧の年代記類については、*Monumenta Germaniae Historica. Scriptorum* に拠った。

# 第三巻の手紙のはじまり

ポーランド公御付の敬すべき祭司達、ならびに、記憶に価するポーランドの他の優れた僧達よ、この小品の作者たる私は[1]、あなたがたがこの世の財を遣り過ごされ、空虚な世界から永遠の世界へ易易と移り行くことができることを祈念するものです。

とりわけ、親愛なる兄弟としてのあなたがたに、心に留めていただきたく思うことがあります。私がこれ程大きな仕事を引き受けたのは、私の内気な心の総飾り[2]を打ち広げ、見せびらかすためではなく、また私の父祖伝来の地と私の親族を、異国の者であり、巡礼の身である私があなたがたに自慢するというのでもなく[3]、私の苦心の果実[4]を私の修道会の誓いの場に持ち帰るためです[5]。

さらにもう一つのことを、あなたがたの分別にかけて明らかにしておきます。私がこの仕事を引きうけたのは、自らを他人の上に置こうとするのではなく、また話しぶりにおいて、私が熟達の士であることを示そうとするのでもなく、むしろ無為を避けるためであり、文章作成の習慣を維持するためであり[6]、また無償でポーランドのパンを食べるわけにもいかないからです[7]。さらに、戦についての多くの物語は、私の無知を刺激して能力を越える重荷を私に負わせ、勇敢なボレスワフ公の高潔と度量が、これに敢えて取り組ませる自信を私に与えたからです。

それゆえ、

我がものを見るのでなく、
汝等のものを見よ。
工の手にあらず、
黄金をこそ吟味せよ。
器にあらず、
甘し酒をこそ飲みたまえ[8]。

おそらく、あなたがたは、この作品の言葉の貧しさを咎めることでしょう。

しかし、少なくともこの作品の中味をより深く受けとり、またこれを豊かな作品として理解していただきたいのです。またもし[9]、あなたがたがポーランドの諸々の王や公を、年代記を書くに価しない者達と見なすならば、あなたがたは明らかにポーランド王国を、どこか未開の野蛮国と考えていることになるでしょう[10]。またあなたがたが、たまたま私を、このような僧職の生活に相応しくない仕事を引き受けた者と批難するならば[11]、私が書いたのは、王や公の戦についてであって、福音に関わる事柄ではない[12]、と答えたい。実際、ローマ人やガリア人[13]の名誉も武勇も、子孫の追憶と模範のため、これらの事が史家の証言によって保存されなかったならば、全世界にこれ程広く知れ渡ることはなかったでしょう。また同様に、偉大なるトロイヤも、それがどれ程破壊され、打ち捨てられていたとしても、詩人の碑文によって永遠の記憶に刻まれているのです。城壁も平地のようにならされ、高楼も壊され、広大で優美な場所も住む人がなく、王公の宮殿は、獣達の侘しいねぐらや住処[14]となっています。にもかかわらず、トロイヤとそのペルガモンは[15]、文字の発する声によって、至るところに知れ渡っています。ヘクトルやプリアモスは[16]、王座にある時よりも砂塵の中にある時の方が多く語られます。アレクサンドル大王について、アンチオケアについて[17]、メディア人やペルシャ人の王について[18]、夷（えびす）人の僭主について、我等はいったい何を記憶しているのか。もし、これ程にも多い彼らの名前を数え上げれば、今日の仕事を明日に延ばさねばなりません。彼らの命が永遠でなく、羽毛の如く移りゆくものであったにもかかわらず、彼らの名声は古（いにしえ）の大詩人の称賛の言葉によって不朽のものとなったのです。

実際、聖人がその善行と奇跡によって尊敬されているように、地上の王や諸侯も戦の凱旋や勝利によって称賛されています。それゆえ、聖人の生活と殉教を教会で教えることが敬虔な事柄であるように、学校や宮廷で王や侯の凱旋や勝利を語り聞かせることは、誇りとすべき事柄です。また聖人の生活や殉教を教会の説教で語ることは、信仰ある人々を敬神の心へと導くように、王公の勇敢な業や勝利を学校や城砦で語りきかせることは、騎士の心に勇気を掻き立てるのです[19]。実際、教会の牧者が魂のために聖霊の果実を追い求めるように、国の守護者も父祖の地の名誉と名声を広げ、この世における栄光を求めるものです。また、神の僕たる者は、神に属することは霊的に神に

従うべきであり、皇帝に属することは、この世の君主達に敬意を払い、彼らに従うべきです[20]。実際、凱旋した高名な人が名声と栄光をその勇気の故に求めたとしても何の不思議がありましょう。カルタゴの女王クレオパトラですら[21]、名声を求めて、身にそなわった徳、すなわち女の徳によってではなく[22]、男のような勇気によってローマ帝国を自分の方に引き寄せようとしました。また支配を欲しながら、海戦で破れた女性が、服従するよりもむしろ自らに恐しい死を選んだのですから[23]、祖国や父祖伝来の地を守り、身に受けた不義不正を正そうとした人々が、恥辱の中で自分の奴僕に屈服するよりも、毒による死ではなく、戦の場で名誉ある死を求めたとしても、何の不思議な事がありましょう。

それゆえ、以上に述べたことから、ポーランドの諸公の事蹟を朗誦することは無駄なことではないことが理解されるでしょう。また同様に、あなたがたの判断によって確認していただきたいことは、この作品が語り部によって朗読されるべきであること、です。さらに私が、嫉妬や私の中に生じるかもしれない虚栄心のために[24]このような大きな骨折りに対する報酬を辞退することのないように、あなたがたの聡明な分別を心よりお願いするものです。実際、賢明な方々が、もし私の仕事を、祖国の名誉にとって、優れた有益なものと判断されるならば、誰かの唆(そそのか)しによって[25]作者から作品に対する報酬を取り去ろうとすることは、賤むべき事柄であり、筋の通らないことであります。

# INCIPIT TERCIUS LIBER
# INCIPIT EPISTOLA TERTII LIBRI

Capellanis ducalibus venerandis | aliisque bonis clericis per Poloniam memorandis, ⁝ presentis auctor opusculi sic bona temporalia preterire, ⁝
二八九 ut liceat expedite de caducis ad permanentia transilire. Primum omnium vos scire volo fratres karissimi, ⁝ quia tantum opus non ideo cepi, ⁝ ut per hoc fimbrias mee pusillanimitatis dilatarem, ⁝ nec ut patriam vel parentes

Meos exul apud vos et peregrinus exaltarem,

sed ut aliquem fructum mei laboris ad locum mee professionis

reportarem. ⁝ § Item aliud vestre discretioni manifesto, ⁝ quia non, ut me quasi ceteris preferendo, ⁝ vel quasi facundiorem in sermone referendo, ⁝ hunc laborem suscepi ; sed ut otium evitarem ⁝ et dictandi consuetudinem conservarem ⁝ et ne frustra panem Polonie manducarem. ⁝ Insuper etiam copiosa bellorum materia ad presumendum onus viribus inequale meam ignoranciam excitavit, ⁝ ipsiusque Bolezlaui belligeri ducis probitas ac magnanimitas audendi fiduciam ministravit. ⁝ § Quocirca

Non mea sed vestra percipite,
Non fabrum sed aurum perpendite,
Non vasa sed vinum ebibite.

Et si forsan in hoc opere verborum nuditatem accusatis, ⁝ ex hiis saltim materiam tractandi profundius et argumentosius habeatis. ⁝ Quodsi reges Polonos vel duces fastis indignos annalibus iudicatis, ⁝ regnum Polonie procul dubio quibuslibet incultis barbarorum nationibus addicatis. ⁝ § Et si forte proponitis me talem talisque vite indignum talia presumpisisse, ⁝ respondebo bella regum atque ducum non euuangelium me scripsisse. ⁝ Numquam enim fama vel militia Romanorum vel Gallorum sic celeberrima per mundum haberetur, ⁝ nisi scriptorum testimoniis memorie posterorum et imitationi servaretur. ⁝ § Maxina quoque Troia, ⁝ quamvis destructa iacet et deserta, ⁝ eterne tamen memorie poetarum titulis est inserta. ⁝ Muri coequati, turres destructe iacent, ⁝ loca spaciosa et amena habitatore carent, ⁝ in palatiis regum et principum lustra ferarum et cubilia secreta latent, | Troie tamen Pergama ubique terrarum scriptura clamante predicantur. ⁝ Hector et Priamus plus in pulvere, quam in regni solio recitantur. ⁝ Quid de Alexandro Magno, ⁝ quid de Antiocho, ⁝ quid de Medorum atque Persarum regibus, quid de tyrannis barbarorum memorarem, ⁝ quorum si tantum nomina recitarem, ⁝ opus hodiernum in diem crastinum prolongarem. § Horum tamen fama veterum vatum preconiis inmortalis, ⁝ quorum vita non est perpetua sed pennalis. ⁝ Nam (sicut) sancti viri bonis operibus et miraculis celebrantur, ⁝ ita mundani reges et principes bellis triumphalibus et victoriis sublimantur. ⁝ § Et sicut vitas sanctorum et passiones religiosum est in ecclesiis predicare, ⁝ ita gloriosum est in scolis vel in palatiis regum ac ducum triumphos vel

victorias recitare. ⁝ § Et sicut vite sanctorum vel passiones ad religionem mentes fidelium instruunt ⁝ in ecclesiis predicate, ⁝ ita militie vel victorie regum atque ducum ad virtutem militum animos accendunt, ⁝ in scolis vel in capitoliis recitate. ⁝ § Sicut enim pastores ecclesie fructum animarum querere debent spiritalem, ⁝ sic defensores honorem patrie famamque dilatare student et gloriam temporalem. ⁝ Oportet enim Dei ministros in hiis, que Dei sunt, Deo spiritualiter obedire ⁝ et in hiis, que sunt cesaris, honorem et servicium mundi principibus exhibere. ⁝ § Quid enim mirum, si viri triumphatores et incliti famam et gloriam appetunt ex virtute, ⁝ cum etiam[gg] Cleopatra Cartaginis regina ⁝ imperium Romanum avida laudis transferre voluit virili audacia, ⁝ non naturali sive feminea probitate. ⁝ Et si femina querens imperium, navali prelio superata, morte terribili semet ipsam perimere maluit quam servire, ⁝ quid est mirum, si patriam vel hereditatem paternam defendentes, ⁝ vel illatam iniuriam persequentes, ⁝ in bello famosa non venenosa (morte) magis appetunt interire, ⁝ quam ignominiose suis obnoxiis obedire. ⁝ § Constat ergo ex hiis superius approbatis ⁝ rebus gestis Polonorum principum (non) in vacuum recitatis, ⁝ § constat quoque vestro iudicio confirmandum, ⁝ vero presens opus interpreti recitandum. ⁝ Insuper illud causa Dei causaque Polonie provideat vestre discrecio probitatis, ⁝ ne mercedem tanti laboris impediat vel odium vel occasio mee cuiuslibet vanitatis. ⁝ Nam si bonum et utile meum opus honori patrie a sapientibus iudicatur, ⁝ indignum est et inconveniens, si consilio quorundam artifici merces operis auferatur. ⁝

1) ［訳注］第一巻の注(4)を参照のこと。第一巻の献辞の中で、尚書官ミハウを年代記作成の発起人と呼んだ年代記作者に関して、第一巻の注(4)は、作者自身がこの年代記の真の作者をミハウと考えていた、と記している。それに対して、P・ダヴィドの研究は、この第三巻の献辞の中に見られる作者の態度を検討し、この作者がポーランドの宮廷に従属した文士ではなく、一定の独立性を持った文人であり、身分は僧侶であるが、自分の文法家としての実力を誇りとし、当時、激しく争われていたグレゴリウス改革に対しても中立的態度を持していた人物であるとし、まさしくこの年代記の真の作家であるとしている。P. David, *Les sources de l'histoire de Pologne a l'epoque des Piasts*. Paris 1934. p. 41-43.

2) ［訳注］第一巻の献辞の中の言葉 "vanitas fimbrias dilatare" 「虚栄の総飾りを広げる」と対応している。その典拠は『マタイによる福音書』二三―五。Matheus. 23-5 "dilatant enim phylactera sua et magnificant fimbrias." 「聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。」。

3）［M］この発言から、ガルが外国出の貴族の生れであるという見解が引き出された。二連の八音節トロカイックの詩。

4）［M］Sallust, *Bellum Catilinae*. 35-3 "quod fructu laboris industriaeque meae privatus statum dignitatis non optinebam," サルスティウス『カティリナ戦記』三五―三「我が労苦と丹精の果実を奪われ、名誉ある地位を得ることができなかった。」

5）［訳注］このプロフェシオ "professio" を多くの研究者は、聖職者の誓願の意味に解して、"ad locam mee professionis" を「修道会の誓いの場に」と訳している。しかし、これに対して、ダヴィドは "professio" を「職業」とりわけ文法・修辞の職と解している。いずれの説が正しいか、確定しがたいが、訳者は通説を採った。Plezia, *Gall* 137-8., David, *Les sources*, p. 42.

6）［訳注］"dictandi consuetudo" 「文章作成の習慣」に関連して、T・ヴォィチェホフスキは、ガルはボレスワフ・クシヴウスティの尚書官房の書記官であった、とする。マレチンスキは、当時のポーランドには、公に直属する尚書官房は存在していないと主張している。これに関連した問題として、ガルの協力者であり、尚書官であったミハウその人の地位について、多くの見解が提出されており、そもそもミハウの尚書官の地位を、世俗の君主権力に属した尚書官ではなく、司教ないしは聖堂参事会の尚書官とする見解が主張されている（ビエロフスキ、グンプロヴィチ、St・ケンチシンスキ、クロトスキ等）、グロデツキは、世俗君主に属する尚書官という見解を支持している。（この見解に立つ者は、レレヴェル、Wt・アブラハム、T・ヴォイチェホススキ、K・ポトカインスキ）。ティツは、バルゼルの見解に依りながら、グニエズノの大司教の尚書官であり、また同時にボレスワフ・クシヴスティの尚書官でもあったと主張している。T. Tyc, *Zbygniew*. p. 47-52.

7）［M］2 Ad Thessalonicenses. 3-8. "neque gratis panem manducavimus ab aliquo." 『テサロニケの信徒への手紙、二』三―八「また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。」

8）［M］三連の十音節トロイカイックの詩。

9）［訳注］プレジアによるガルの文体研究によれば、この "quodsi" の用法は、古典期のラテン語の用法であるとされるが、年代記全体の文体は、古典ラテンと非古典的・中世的なラテン語の混合体である、とされている。Plezia, *Kronika Galla* p. 99.

10）［訳注］バルゼルによれば、王公の行為を国民の歴史と同一視するこの見地は、『匿名のガル年代記』の後に書かれたカドゥベックの年代記も踏襲している。O. Balzer, *Studyum o Kadłubku*. t. 1. p. 214.

11）［P］この叙述から、以下のことが引き出される。すなわち、ポーランドにおける若干の人々（もちろん聖職者）は年代記作者の生活様式に関して疑義をさしはさみ、作者の生活はあまりに世俗的なものと批判した。

12）［訳注］プレジアによれば、この年代記は、神学的・聖書学的博識に欠けている。ウルガータを典拠とする箇所は一一六箇所に及び、聖書の物語への言及も若干見られるが、しかしそれらは初歩的なものにすぎない。Plezia, *Kronika Galla*, p. 127.

13）［M］Sallust, *Bellum Catilinae*, 53-3 "gloria belli Gallos ante Romanos fuisse" サルスティウス『カティリナ戦記』五三―三「ガリア人の戦争の栄光は、ローマ人に勝っていた。」

14）［M］Vergil, *Georgics* 2-471. "lustra ferarum", Vergil, *Aeneid* III-646, "deserta ferarum lustra domosque." ヴェルギリウス『ゲオルギコン』二―四七一「獣の巣」、ヴェルギリウス『アエネイス』三―六四六「獣達の侘しいねぐらや住処」。

15) ［P］ペルガモン ――トロイにおける城（クラコフのバベル城の如く）。
16) ［P］ヘクトルとプリアモス ――トロヤの王プリアモスとその息子ヘクトルは、トロヤ伝説の中に登場する最も重要な人物に属する。
17) ［P］アンチオケア ――おそらく、作者は、紀元前三世と二世の交りに君臨したシリア王、アンチオキア三世を念頭においているのであろう。
18) ［M］この記述は、ユスティヌスから採られたものである。
19) ［M］Sallust, *Bellum Catilinae*, 59-6. "ea commemorando militum animos accendebat." サルスティウス『カティリナ戦記』五九―六「これに言及することによって、騎士の心を引き立てた。」
20) ［M］Mattheus, 22-21. "reddite ergo quae sunt Caesaris Caesari et quae sunt Dei Deo"『マタイによる福音書』二二―二一「では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」
21) ［P］クレオパトラ ――紀元前一世紀のエジプトの女王。作者はカルタゴの神話上の女王ディドナと混同している。
22) ［P］"nataralis sive feminae probitos"「身にそなわった徳、すなわち女の徳」――「徳」"zacność"（"probitas"）は我が年代記の中心的な道徳観念の一つである。男の徳（騎士の徳）は、勇気、気前の良さ、敬虔であり、女の徳は、分別、貞節、慈愛である。男の徳の典型はボレスワフ・フロブリのそれであり、女の徳はフロブリの妻のそれである。
23) ［P］アクチウムの海戦においてローマ軍に敗れたクレオパトラは、彼らに降ることを望まず、身を毒まむしに任ねた。
24) ［P］"occasio mee cuiuslibet vanitatis"「私の中に生じるかもしれない虚栄心」――作者は、自分の振舞が批難を呼びおこしていることを自覚している。
25) ［P］"consilio quorundam"「誰かの唆し」――年代記作者は、宮廷内に敵を持っていた。彼らは作者が望んでいた報酬の下賜を取りやめるように画策していた。

## エピローグの始まり(1)

称賛、名誉、権力、有徳、栄光は神に(2)、
ポモジャ人は、神の力の下に(3)、
平安と勝利は、凱旋の君ボレスワフに(4)。

二八五 我等、万物をイエス・キリストの栄光に捧げん。
キリスト、あまねく全ての世界を己の知恵によりて統べたまう。
そは、人の力も武士（もののふ）の力も成し得ざりしことなり。

ボレスワフ、かつて古き城を包囲せしことあり。

かの城は、その兵も、その武具も、その地勢も、堅く、鉄壁の構なりき。
しかして、かの城、ボレスワフを脅かす災いの種となりぬ。

ボレスワフに包囲されたる者達を助けんと、ポモジャ人、
油断したる攻め手を討たんと急ぎしが、
期待は裏切られ、虚しき敗走を余儀なくされたり。

兵は皆、徒のままにて、薄暗き間道を通り、
騎士達は、駑馬に逃亡の望みを措かず、
秘かに誰も知らぬ小道を抜けて姿を現せり(5)。
ボレスワフ公、甲冑を纏って、わずかの手勢を率い、
宮中伯スカルビミルも一隊を引き連れて、
七百余名、三万の敵兵と打ち合えり。

すでに前夜に斥候を放ち、
来るべき者等、現われたるを知りて、
そこ、かしこと兵を配し、伏兵の計を採れり。

敵方も身を屈め、闘いの構えを整えたり。
四方八方に、針鼠の如く槍を突き立て、
隊を組んで進まず(6)、円陣のままに不動たり。

ボレスワフ公、機を見るに敏なり、
先見の明もて、兵を回らし、敵を取り囲めり。
ああ、勇ましき、戦好きの君よ、誉を求める君よ。

スカルビミル、反対の側から敵陣の中央を貫ぬきて、 二八四
味方を激しき戦場へと叱咤して、
「ポモジャ人よ、これ程の剣、見しことなからん」と叫びたり。

さらにまた何をか語るべき、

ポモジャ人、戦に背を向けて逃げ去せり、
かかる殺戮はかつてなかりしものなれば。

かくてボレスワフ、七つの城を手に入れたり。
我等にこの戦勝をもたらせし神と聖ラウレンティウスを称えん[7]、
この聖(ひじり)の祭日に戦がなされしゆえに。
かくて、この地に、聖(ひじり)に相応しき御堂を建てん[8]。

ボレスワフ、輝しき勝利の後に、
皇帝との平和と友好の盟約を結びたり。
また兄弟に相応しき和解の絆が結ばれることとなりぬ。

しかるに、皇帝、いかなる因(わけ)ありて、公然とポーランドに赴きしか[9]。
いか程の慢心を抱きて、いか程の力もてこの王国に攻め入りしか。
はたまた誰を捨て、誰を挙げんと、すでに心に定めしか。
すでにこは、よく知られたることなり。

さあれど、神の御心に逆う力や謀は、何程のことをなしえよう。
げに、神の御心なくして何事もなされず、
草の葉一枚もそよぐことなし[10]。
神、欲したまわば、山脈を谷へと変えたまうべし。

ボレスワフ、大公たり[11]。大いなる君として王国を治めたまいて、
荒々しき獅子の如く、戦に立ち向い、
抗う者は打ち破られ、飛ぶが如く逃げ惑う。

二八三 ボヘミア人よ、汝等、何故に首を傾けるをためらうや。
汝の王、自らボレスワフに服すると知れば、
汝らもまた力で抗う能わざるをさとらん[12]。

かくの如き公に、敢えて戦を交えんとする敵はなく、
また自ら、この公に匹敵する者と公言する者もなし。

さらにまた、彼とともに平和を楽しむを喜ばざる隣国はなし。

敵には恐るべき勝利者として現われながら、
すべての者に惜しみなく施す者という名誉を持ち、
ハンガリア王をその地位に保たしめたは、
まさにボレスワフその人なり。

さあれど、今はボレスワフの成し遂げた事どもを詳しく述べる時にあらず。
そはすべて鎖と牢獄が知るところなれば。
我等は、ただ欺きのためでなく、称賛のためにこの小品をボレスワフに捧げたてまつる。

## EXPLICIT EPISTOLA
## INCIPIT EPILOGUS

Deo vero laus et honor, regnum, virtus, gloria
Pomorania subiugatur cuius sub potentia
Bolezlauo triumphanti salus et victoria

Ad honorem Ihesu Christi referamus omnia,
Qui gubernat totum mundum sua sapiencia.
Non hec fecit vis humana sed neque militia.

Bolezlaus obsidebat castrum antiquissimum,
Viris, armis (et) nature situ munitissimum
Et ad dampnum sui regni periculosissimum.

Pomorani venientes obsessis succurrere
In incautos obsessores properant irruere,
Sed inani, spe decepti, sunt acti corruere.

Per opaca deviando cuncti fere pedites,
Fugiendi ne spem ponant in caballis milites,

Ex occulto per ignotos emersere tramites.

Bolezlaus dux armatus cum paucis militibus,
Scarbimirus palatinus cum collateralibus
Septingenti conflixere cum XXX milibus.

Namque nocte precedente fecerant excubias
Et audito, quod venirent, miserant insidias.
Sic habebat dux transmissas huc et illuc copias.

Illi vero recurvati ordinarunt prelium,
Hastis suis circumquaque plectentes ericium
Nec procedunt catervatim, sed stant per cyrcinnium.

Bolezlaus dux de tali causa satis callidus
Transgirando vertit eos usquequaque providus,
Ut vir audax bellicosus atque laudis avidus.

Scarbimirus ex adverso se confert in medios
Et hortatur et confortat ad pugnandun socios.
Tales, inquit, Pomorani, non sensistis gladios.

Sed quid plura? Terga vertunt Pomorani prelio,
Neque fuit super illos tanta cedes alio.
Septem castra conquisivit dux de belli premio.

In hiis ergo collaudemus Deum et Laurencium,
Die cuius sacrosancto factum est hoc prelium,
Inde sibi fiat ibi dignum edificium.



Tam preclara Bolezlaui descripta victoria,
Assignetur cum augusto pax et amicitia,
Confirmetur, sicut decet, fraterna concordia.

Qua de causa palam constat imperator venerat,

Quanto fastu, qua virtute regnum hoc intraverat,
Quos deponi, quos preponi, iamiam disposuerat,

Sed quid valet contra Deum virtus vel consilium,
Sine cuius nutu nil fit, nec movetur folium,
Qui convertit in convalles, si vult, iuga montium.

Bolezlauus stat in regno magnus dux et dominus
Et paratus est ad bellum sicut leo cominus,
Qui resistit, superatur, sed non fugit protinus.

Bohemenses quid tardatis colla vestra subdere,
Cum cernatis ipsum regem Bolezlauo cedere
Et sciatis vos non posse viribus resistere.

Non est hostis tanto duci, congredi qui valeat
Et qui parem profiteri sese palam audeat,
Nec vicinus, qui cum eo de pace non gaudeat.

Nam in hostes triumphator existit mirificus,
Erga cunctos eum honore dator est munificus
Vngarorum rex per eum consistit pacificus.

Non est tempus. quanta fecit, enarrandi singula,
Que noverunt, que senserunt carceres et vincula,
Nos ad laudes, non ad fraudes, damus hec munuscula

1）［B］以下のテキストのオリジナルは十五音節トロカイックの詩の六〇連から成っている。
2）［M］I Tim, 1-17. "soli deo honor et gloria." 『テモテへの手紙一』一一一七「唯一の神に、誉れと栄光が」Apocalypsis. 7-12, "honor et virtus et fortitudo Deo nostro." 『ヨハネの黙示録』七一一二「誉れ、力、威力がわたしたちの神にありますように」。
3）［M］Iudith, 5-24 "subiugati erunt sub iugo potentiae tuae." 『ユディト記』五一二四「汝の力の下に服するであろう。」（この箇所は『合同訳聖書には欠けている。）
4）［M］Apocalypsis, 19-1 "salus et gloria et virtus Deo nostro est." 『ヨハネの黙

示録』一九一一「救いと栄光と力とは、わたしたちの神のもの」。

5) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*. 48-2. "per tramites occultos exercitum Metelli antevenit." サルスティウス『ユグルタ戦記』四八—二「秘かな小道を通ってマテルスの軍勢に先んじる」。

6) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 97-4. "non acie neque ullo more proeli sed catervatim, ....in nostros incurrunt." サルスティウス『ユグルタ戦記』九七—四「戦の慣しに従わなかったが、隊列を組んで、……我が軍に襲いかかった。」

7) [M] Ecclesiasticus, 51-1, "et conlaudabo te Deum salvatorem meum," 『シラ書』五一一一「わたしの救い主である神、あなたをほめたたえ」。

8) [M] ここから、ナクウォの地に聖ラウレンティウスの教会を建てることは、年代記作者の希望であったことが推測される。Tyc, *Zbygniew*, p. 42.

9) [P] この連と次の連とは、ヘンリク五世のポーランド侵入を描く第二章から第十六章までの内容に関連している。ヘンリクの目的の一つは、追放された共同統治者ズビグニエフの復帰であった。

10) [M] Iob. 13-25 "contra folium, quod vento rapitur ostendis potentiam tuam." 『ヨブ記』十三—二五「風に散る一葉にすら、汝の力を示す」(『ウルガータ』のテキストはこのとおりである。)

11) [M] グロデツキによれば、一一〇八年にズビグニエフが追放された時から、ボレスワフは大公の名を称した。Grodecki, *Polska, jej dzieje i kultura*. p. 88.

12) [P] 第三巻第十七章から第二三章に描かれる、ボレスワフによるボヘミア人との戦を示している。

# 第一章　ボレスワフ三世の功績について、第三巻が始まる

ボレスワフ三世の、記憶に価する騎士の業は数え切れない程多くあるが、中でも聖ラウレンティウスの祭日に、いかなる事柄がポモジャ人の上に生じたか、また皇帝の怒りがどのようにして抑えられたか[1]、さらに激しく襲いかかるドイツ人に対して、人々がどのように抵抗したか[1]、はとくに取り上げるべき事柄であろう。

さて、ポーランドとポモジェの国境にナクウオという名の城塞があった[2]。その城塞は、城を囲む沼沢と城の構えによって堅固であった。そこで戦好きの公は、その城を攻め取ろうとして、軍勢とともに陣を張り、武具と城攻めの機械を用いて激しく攻め立てた。城中の人々は、これ程多数の軍勢には抗しえないと考えたが、まだ味方の諸侯達から援軍が期待できると思って、休戦を求め、特定の日を定めて、この日の後、援軍が自分達をもし助けに来なければ、敵の手に自分達と町とを引き渡すこととした。こうして彼らを攻撃

する側も休戦に同意したが、攻撃の準備を先に延ばすことはなかった。その間、城の使者達はポモジャ人の軍に到着し、敵側と結ばれた休戦の約束を告げた。その時、ポモジャ人は、使者達の言うことを聞いて非常に驚き、父祖伝来の地のために戦って死ぬことを[3]、あるいはまたポーランド人を討ち、勝利を手に入れることを誓った。そこで、彼らは、危険を平等にし、すべての者に大きな自信と勇気を与えるために、馬を棄て[4]、いかなる道もいかなる間道も通らず、獣の巣[5]と深い森を突っ切り、決められた日ではなく、聖ラウレンティウスの聖日に[6]、あたかも野ネズミが穴から出てくるように、姿を現わした。しかしながら、彼ら自身の言い伝えによれば、人の手ではなく、神の手によって滅んだといわれている[7]。

神は、その聖なる所にいまして栄光に輝けり！[8]まさにその日は殉教者聖ラウレンティウスの尊き日であった。そしてキリスト教徒の一団がミサの儀式が終って出てきたまさにその時、突然そこに夷（えびす）人の軍勢が間近かに迫ってきた[9]。人々の救済に駆けつける殉教者ラウレンティウスよ[9]、今キリスト教徒は何をなすべきか。どこに赴くべきか。敵の軍勢が不意に襲いかかったので、戦に備える暇もなく、味方の数はわずかで、敵は多く、逃亡は遅々として、しかもボレスワフの好むところではない。殉教者[10]ラウレンティウスよ、荒れ狂う民からその力を奪いたまえ！[10]その時、味方の軍勢は、いかに多くとも二部隊しかいなかった[11]。そのうちの一部隊は果敢なボレスワフが率い、他の部隊は旗手スカルビミルが率いていた。というのはその他の大勢の兵士達のうち、ある者は馬の飼料を捜し、他の者は食糧を求め、また他の者は、道や間道や敵の来襲の見張りをしていたからである。そこで疲れを知らぬボレスワフは、間髪を入れず部隊を引き連れ、次のような言葉で兵士達を励ました。

「いまだ破れたことのない若者達よ！諸君の勇気、降り懸る危険な脅威、父祖伝来の地への愛情こそ、我が言葉よりも強く諸君を励ますであろう。今日、神の御恵みと聖ラウレンティウスの御請願によって、ポモジャ人の偶像崇拝と彼らの騎士の傲慢は、諸君達の剣によって打ち砕かれるであろう。」そしてこれ以上一言も発せず[12]、敵の回りを旋回しはじめた。というのは、彼らは自分の槍を地面に打ち込み、その穂先を敵に向け[13]、同時に自らは密集陣形をとったので[13]、誰も策なしに力づくで彼らの中に押し入ることはでき

なかったからである。実際、彼らは、前に述べたようにほとんどすべて徒(かち)で、戦のし方もキリスト教徒の慣習に従ったものではなく、羊をねらう狼のように、地に膝をつけて身を屈めていた。休むことを知らないボレスワフが、敵を引きつけつつ、その周囲を、疾走しているというよりもむしろ飛び回っているようにみえたその時、スカルビミルが反対の側から敵陣に突き入る場所を見い出し、最も密集した陣形に間髪を入れずに押し入った。こうして夷人(えびすびと)は、打ち込まれ、包囲されたので、はじめのうちは激しく抵抗していたが、結局、敗走せざるを得なくなったのである[14]。事実、その地においては、キリスト教徒の側にも若干の勇敢な騎士達が倒れたが、異教徒達においては、三万人のうち、やっと一万人だけが逃げ去ることができただけである[15]。私は誓っていうが、この殺戮は、神の業であり聖ラウレンティウス[15]の懇請によって遂行されたものである。その場に居あわせた人々はすべて、千人にも満たない一握りの騎士達がどのようにして、またたく間にこの虐殺を行ったかを見て、驚嘆した。ボモジャ人自身が正確にその数を数えたといわれているが、それによると、倒れた者の数は二万七千人といわれている。また沼地に入った者は、そこから一人も抜け出すことができなかった。他方、城塞の者達は、希望がすべて砕かれ、また他のところからも誰からも援軍を期待することができないことを悟って、命とひきかえに町を引き渡した。他の六つの砦の者達もそれを聞いて、同様の決定を下し、自分達の身柄と砦とを引き渡した[16]。

# INCIPIT III LIBER DE GESTIS BOLESLAUI III

## (1)

二七七

Multis et innumerabilibus Bolezlaui tercii gestis militaribus memorandis ⁝ intitulandum precipue, ⁝ qualiter sancti Laurentij die ⁝ contigerit Pomoranis, ⁝ utpote repressa sit ira cesaris ⁝ et ut inpetuosis obstitum fuerit Alemannis. ⁝ Quoddam namque castrum nomine Nakel in confinio Polonie ac Pomoranie paludibus et opere firmum constat, ⁝ ad quod capiendum dux belliger cum exercitu suo sedens, armis et machinis

laborabat. ⁝ § Cumque oppidani non posse tante multitudini resistere se vidissent ⁝ et cum tamen a suis auxilium principibus expectassent, ⁝ inducias quesierunt, ⁝ diemque certum indiderunt, ⁝ infra quem, si sui eos non iuvarent, ⁝ in potestatem hostium et oppidum et se darent. ⁝ Inducie quidem eos assultandi conceduntur, ⁝ sed apparatus tamen expugnandi minime differuntur. ⁝ § Interim oppidanorum nuntii Pomoranorum exercitum convenerunt, ⁝ eisque pactionem suorum factam cum hostibus retulerunt. ⁝ Tunc vero Pomorani, ⁝ audita legacione stupefacti, ⁝ coniurant insimul pro patria vel se mori, ⁝ vel victoriam de Polonis adipisci. ⁝ § Dimissis igitur equis, ut adequato periculo fiducia cunctis et audacia maior esset, ⁝ nullam viam vel semitam gradientes, ⁝ sed ferarum lustra condensaque silvarum irrumpentes, ⁝ non in die statuto, ⁝ sed in sancti Laurentij sacrosancto, ⁝ quasi serices de latibulis emerserunt, ⁝ indicioque suo non humana, ⁝ sed manu divina, perierunt. ⁝ Gloriosus Deus in sanctis suis ; venerabilis enim dies sancti Laurentij martiris existebat ⁝ et in illa hora christianorum concio de missarum sollempniis exiebat, ⁝ et ecce subito barbarorum exercitus ibi cominus imminebat. ⁝ Martir Laurenti, ⁝ populo succurre merenti. ⁝ Quid nunc faciant christiani, ⁝ quo se vertant. ⁝ Exercitus hostium inprovisus, ⁝ acies ordinandi non est tempus, ⁝ ipsi pauci, ⁝ hostes multi, ⁝ fuga tarda, numquam placita Bolezlauo. Martir Laurenti, ⁝ populo vim tolle furenti. ⁝ § Igitur militibus quotquot erant in duobus tantum agminibus ordinatis, ⁝ alterum agmen rexit ipse belliger Bolezlauus, ⁝ alterum vero eius signifer Scarbimirus. ⁝ Nam cetere multitudinis alii pabulum equorum, alii victualia queritabant, ⁝ alii vero vias et tramites et adventum hostium observabant. ⁝ Nec mora Bolezlauus inpiger educit agmina, sic verbis paucissimis commonendo. Vestra probitas ⁝ et imminentis periculi necessitas, ⁝ amorque patrie magis quam oracio mea, vos invictissimi iuvenes, exhortentur. Hodie, Deo favente, ⁝ sanctoque Laurencio deprecante, ⁝ Pomoranorum ydolatria ⁝ ac militaris superbia vestris ensibus conteretur. Nec plura locutus cepit hostes in circuitu transgirare, ⁝ quia sic in terra hastas suas versis cuspidibus in hostes affixerant, ⁝ seseque simul constipaverant, ⁝ quod nullus poterat ad eos virtute nisi cum ingenio penetrare. ⁝ Erant enim, ut dictum est superius, pedites fere cuncti, ⁝ nec ad prelium more christianorum ordinati, ⁝ sed sicut lupi insidiantes ovibus in terram poplitibus recurvati. ⁝ Dumque

magis inpiger Bolezlauus circumquaque volitare videretur, quam currere. ⁝ transversis in eum hostibus, Scarbimirus intrandi locum inveniens ex adverso, non differt in cuneos diutius confertissimos penetrare. ⁝ Penetratis itaque barbaris ac vallatis, acriter inprimis resistunt, ⁝ sed coacti tandem fugam petunt. ⁝ De christianis ibi quidam probi milites cadunt, ⁝ paganorum vero de triginta milibus decem milia vix evadunt. ⁝ Testor Deum ope cuius sanctumque Laurentium, ⁝ prece cuius facta fuerit ista cedes. ⁝ Ammirabantur, ⁝ qui aderant, quomodo tam subito a militibus minus mille peracta fuerit tanta strages. ⁝ § Dicuntur enim ipsi Pomorani certo numero computasse ⁝ de suis ibi XXVII milia corruisse, ⁝ qui in paludibus interessent, ⁝ nec illi quidem sic evadere potuissent. ⁝ § Oppidani vero videntes se totam spem amisisse, ⁝ nec auxilium aliunde vel a quolibet expectare, ⁝ civitatem vita donata reddiderunt. ⁝ § Audientes autem hec de sex aliis castellis oppidani consilium itidem inierunt, ⁝ se ipsos videlicet municionesque tradiderunt. ⁝

1）［訳注］プレジアによれば "repressa *sit* ira cesaris et ut inpetuosis obstitum *fuerit* Alemannis" の文章における "esse" の二通りの用法は（sit, fuerit.）、年代記作者の文体の、中世ラテンと白銀期ラテンの混在を示している。とくに受動態、完了のこの形式 "obstitum fuerit" は、白銀期ラテンによく見られる形式の継承であるという。Plezia, *Galla*, p. 92.

2）［P］ナクウォ Nakło。ノテツ川沿いの今日のナクウォ。ナクウォをめぐる戦は、すでにウァデクスワフ・ヘルマンの時代、一〇九一年に行われた。

3）［M］Horatius, *Carmen*, III, 2-13." dulce et decorum est pro patria mori" ホラティウス『歌』第三巻二―一三「父祖の地のために死ぬことは、快き、美しきこと。」

4）［M］Sallust, *Bellum Catilinae*, 59-1. "Dein remotis omnium equis, quo militibus exaequato periculo animus amklior esset," サルスティウス『カティリナ戦記』五九―一「それから、兵士達の危険を等しくし、これによって彼らの勇気をより大きく駆りたてるために、すべての馬を遠ざけ」。Caesar, *de Bello Gallico*, I-25. "remotis equis, ut aequato omnium periculo spem fugae tolleret." カエサル『ガリア戦記』一巻―二五「すべての者の危険を等しくし、逃亡の希望を取り除くために、馬を遠ざけ」。

二七五

5）［訳注］第三巻の冒頭の手紙の注（14）を参照。

6）［P］一〇九年八月十日。

7）［M］Terentius, *Eunuchus*, V 7-23." "Egomet meo indicio, quasi sorex hodie perii" テレンティウス『宦官』五巻七―二三「私自身が、私の申し立てによって、野ネズミのように今日倒れた。」

8）［M］Psalm 67-36 "mirabilis Deus in sanctis suis." 『詩編』六七（『合同訳』六八）―三六「神よ、あなたは聖所にいまし、恐るべき方」。

9)-9) ［P］レオ詩体のヘクサメトロの詩。
10) ［M］レオ詩体。Lucanus, De *Bello Civili* II 249. "An placuit ducibus scelerum populique furentis." ルカーノス『内乱』第二巻二四九「犯罪の頭目や狂った民衆の首領の味方となったのか。」
11) ［訳注］グンプロヴィッチは、兵士の数を七〇〇人と推定している。Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*. p. 75.
12) ［M］Lucanus, *De Bello Civili*, II. 490 "Nec plura locutus" ルカーノス『内乱』第二巻四九〇「これ以上一言も発せず」。Vergilius, *Aeneid*, VII 599. XI 461. "nec plura locutus." ヴェルギリウス『アエネイス』第七巻五九九、第十一巻四六一「これ以上一言も発せず」。
13) ［M］Verbilius, *Aeneid*, I 81. "conversa cuspide montem impulit in latus." ヴェルギリウス『アエネイス』第一巻八一「槍の穂先をめぐらして、山の側面を打った。」
14) ［M］*Ann. s. Crucis vet.* (*M. P. H.* t. II p. 773) "1109 tertias Boleslaus aput Nackel vicit Pomeranos." 『聖十字架年報』「一一〇九年、ボレスワフ三世は、ナクウォ近くでポモジャ人を打ち破った。」
15)-15) ［M］十五音節トロカイックの詩。
16) ［訳注］グンプロヴィッチは、この六つの砦の名を挙げている。Ujście, Vandsburg, Racią̇ż, Zieten, Wissek, Prochy. Gumplowicz, *Zur Gesch. Polens*, p. 75-76.

## 第二章　ボレスワフへの皇帝の手紙

これらの事柄が行われていた時、まだローマで戴冠していなかったが、二年後には帝冠を戴くはずであった皇帝ハインリヒ四世は[1]、強大な軍勢を率いてポーランドに侵入しようとした時[2]、前もってボレスワフに、使者を派遣して、以下のような言葉を伝えた。「敵であれ、またとりわけ自分の臣下であれ[3]、その者が臣従の意志を表しようとする時に、彼に和平を告げずにその国境を犯すこと、またその者が己の身を守らんとして反抗する場合に、彼に戦の用意をさせずに敵意を抱いてその者の国境を越えること、これらのことは皇帝に相応しくなく、またローマ法によっても禁じられていることである。それゆえ汝は、汝の兄に国の半分を与えて彼を受け入れ[4]、さらに我がもとに毎年三百マルクの貢納金を、もしくはそれと同数の騎士を出征時に差し出すか、それとも汝が欲するならば、我と刀でポーランドを分割するか、そのどちらかを選ぶべし。」

北の公[5]ボレスワフは、これに答えていう。「汝が我等の金やポーランドの騎士を貢納として要求したとしても、もし我等が我等の自由を守らなければ、

我等は男でなく女と見なされるであろう。謀反を好む人物を受け入れることも、彼とともに一つの王国を分割統治することも、我が臣民の一致した勧めと我自らの自由意志の決定がなければ、いかなる権力も私にこれらのことを強制することはできないであろう。しかしながら、もし汝が荒々しい力を用いるのではなく、誠の心をもってローマ教会を助けるために金銭や騎士を求めるならば、汝は、おそらく汝の祖父が我等の祖父達のもとに見い出したものに勝るとも劣らない援助と助言[6]を我等のもとに見い出すことであろう。」

ゆえに誰を脅かさんとするやを心せよ、
しかして汝、戦を望まば、そを見い出さん[7]。

## (2) EPISTOLA IMPERATORIS AD[a] BOLEZLAUM[1]

Dum hec aguntur, Henricus imperator III, ⁝ Rome nondum coronatus, ⁝ secundo quidem anno coronandus, ⁝ cum verbis huiuscemodi Bolezlauo legationem premisit, cum exercitu violenti Poloniam in vasurus, dicens. § Indignum est enim imperatori legibusque Romanis inhibitum fines hostis presertimque sui militis prius hostiliter introire, ⁝ quam eum sciscitari de pace, si voluerit obedire, ⁝ vel de bello, si resisterit, ut se valeat premunire. ⁝ Quapropter aut oportet te fratrem tuum in regni medietatem recipere, ⁝ mihique' CCC marcas annuatim tributarias, vel totidem milites in expedicionem dare, ⁝ vel mecum, si vales, ense Polonorum regnum dividere. ⁝ Ad hec Bolezlauus, dux septentrionalis, respondit : Si pecuniam nostram vel Polonos milites pro tributo requiris, ⁝ si libertatem nostram non defendimus, pro feminis nos habeas, non pro viris. ⁝ Hominem vero seditiosum recipere, ⁝ vel unicum cum eo regnum dividere, ⁝ non me coget ullius violencia potestatis, ⁝ nisi meorum commune consilium et arbitrium mee proprie voluntatis. ⁝ Quodsi bonitate, non ferocitate pecuniam vel milites in auxilium Romane ecclesie postulasses, ⁝ non minus auxilii vel consilii forsan apud nos, quam tui antecessores apud nostros impetrares

Ergo provideas, cui minaris,
Bellum invenies, si bellaris

1）［P］ハインリヒ四世(ローマ皇帝として。ドイツ王としてはハインリヒ五世の名で知られている。ポーランド語の呼び名としてはヘンリク四世である。)。在位は一一〇六年から一一二五年まで。皇帝戴冠は一一一一年四月十一日。ハンガリアへの攻撃は一一〇八年の九月に行われた。
2）［P］この戦のもっとも新しい研究は、K. Maleczyn'ski, *Wojna polsko-niemiecka* 1109r. Katowice-Wroctaw 1946.
3）［M］これらの言葉 "Sui militis" から、ボレスワフ・クシヴウスティは、ガルの見解においては、皇帝ハインリッヒの封臣の地位に置かれていたとされる。
4）［P］"fratrem tuum"「汝の兄を」――ズビグニエフを指す。
5）［P］年代記の作者が第二巻第三九章以下において用いたボレスワフ・クシヴウスティの呼び名。
6）［P］「援助と助言」"auxilium et consilium"の付与は、封臣の基本的な義務に属していた。ガルの理解においては、クシヴウスティは、理論上は、皇帝の自分に対する封建的上位権を否認してはいないが、実際上は、ポーランドの内政問題に対する皇帝のいかなる干渉も認めていない。
7）［M］二連の十音節イアンボスの詩。

# 第三章

この応えを聞いて、皇帝は常軌を逸する程の怒りにとらわれた。そしてある企てを心に抱き、その企ての示す道を歩みはじめた。しかしそれは、自分にとっても、また自分の味方にとっても、極めて大きな罰を受けることなしには出ることも戻ることもできない程の道であった。ズビグニエフもまた、こうして怒りに燃えた皇帝をさらに煽り立て、皇帝に反抗するのはわずかなポーランド人だけだと請け負った。さらにまた、略奪と窃盗によって生活することに慣れたボヘミア人も[1]、皇帝に向って、自分達はポーランドの森に通じる道や間道に精通していると言い触らして、ポーランドに侵入するように唆した。こうして皇帝は、このような誘いと助言とによって、ポーランド征服の希望を抱き[2]、軍をポーランドに進めたが[3]、ビトムの町に到着した時、皇帝はあらゆる点において幻滅を味った。実際、皇帝は、ビトムの砦が非常に強固な武器と防壁を備えているのを見て怒りを発し、慣りの言葉をもってズビグニエフの方を振り返り、言った。「ズビグニエフよ、ポーランド人が汝を君主として認めるのはこのような態度によってか、これが、弟を棄て、汝による統治を求めている者の態度なのか」。皇帝が、防備においても地勢にお

いても砦を囲む堀においても強固で、占領しがたいビトムの砦を、隊を整えて迂回しようとした時、皇帝の軍勢の中の高名な騎士達が数名、ポーランドにおいて自分達の騎士の技量を認めさせ、またポーランド人の力と勇気を試そうとして、向きを変えて砦の方に駆け寄った。それに対して、砦の者達は、城門を開き、刀を抜いて出陣し、種々さまざまの部族からなる大軍勢にも、ドイツ軍の突撃にも[5]、また皇帝そのものの存在にも怯まず、勇敢に、また大胆に、先を争って抗戦した。皇帝は、武具を身に付けぬ者が盾持ち兵に対して、また盾持ち兵が甲冑の兵に対して、抜身の刀だけをふり上げて闘いを挑み、まるで宴会に赴くように戦場に嬉々として急ぐのを見て[6]、名状しがたい程に驚嘆した。その時、皇帝は自分の騎士達の慢心に憤りを覚えながらも、弩兵と弓兵をそこに送り、砦の兵士達がこれによって後退し、城の中に舞い戻るように圧力を加えた。しかしながらポーランド兵は、四方から飛んで来る弾や矢を雪や雨の滴のように扱った。その時その場ではじめて皇帝は、ポーランド人の大胆さを知ったのである。実際、皇帝は自分の兵士達のすべてを無傷なままに呼び戻すことはできなかった。しかし今しばらくは、皇帝がポーランドの森をさまようことを許しておこう。そして我々としては、火を吐くポモジェの竜[7]に話をもどすことにしよう。

## (3)

Ex qua responsione cesar pernimium ad iracundiam provocatus, ⁝ talia mente concipit, ⁝ talemque viam incipit, ⁝ unde non exibit, ⁝ neque redibit, ⁝ nisi se ipso suoque dampno quam maximo castigatus. ⁝ § Zbigneus quoque cesarem iratum ex hoc multo magis incitabat, ⁝ quia paucos de Polonis sibi resistere promittebat. ⁝ Insuper etiam Bohemi, ⁝ vivere predis et rapinis assueti, ⁝ cesarem Poloniam intrare animabant, ⁝ quia se scire vias et tramites per silvas Polonie iactitabant. ⁝ § Cesar ergo talibus monitis et consiliis superandi Poloniam in spem ductus, ⁝ ingrediens, ⁝ Bytomque perveniens, ⁝ in hiis omnibus est seductus. ⁝ Namque castrum Bytom sic armatum ⁝ sicque munitum ⁝ aspexit, ⁝ quod Zbigneum iratus cum verbis indignacionis respexit. ⁝ Zbigneue, cesar inquit, sic te Poloni pro domino recognoscunt ⁝ sic fratrem relinquere tuumque dominium sic deposcunt. ⁝ § Cumque castrum Bytom municione situque nature ⁝ et

一七一

aquarum circuicione inexpugnabile ⁝ cum aciebus ordinatis preterire voluisset, quidam de suis famosi milites ad castrum declinaverunt, volentes in Polonia suam miliciam comprobari, ⁝ viresque Polonorum et audaciam experiri. ⁝ § At contra castellani portis apertis et extractis ensibus exierunt, ⁝ nec multitudinem tam diversarum gentium, ⁝ nec impetum Alemannorum, ⁝ nec presentiam cesaris metuentes, ⁝ sed in frontibus eis audacter ac viriliter resistentes. ⁝ § Quod considerans imperator, vehementer est miratus homines scilicet nudos contra clipeatos, ⁝ vel clipeatos contra loricatos ⁝ nudis ensibus decertare ⁝ et tam alacriter ad pugnam velud ad epulas properare. ⁝ § Tunc quasi suorum presumpcioni militum indignans, suos balistarios et sagittarios illuc misit, quorum terrore castellani saltim sic cederent ⁝ et in castrum sese reciperent. ⁝ At Poloni pila vel sagittas, que undique volitabant, ⁝ quasi nivem vel guttas pluvie computabant. ⁝ Ibi vero cesar primum Polonorum audaciam comprobavit, ⁝ quia suos inde cunctos non incolumes revocavit. ⁝ § Nunc autem paulisper cesarem spatiari per silvas Polonie permittamus, ⁝ donec draconem flammivomum de Pomorania reducamus. ⁝

1）［P］この悪意に満ちた特徴づけは、年代記作者がチェコ人に対して好意を持っていないことを示している。第三巻十章、第二十章の同様の表現も参照。

2）［M］Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 29 3 "Iugurtha,....in maximam spem adductus." サルスティウス『ユグルタ戦記』二九—三「ユグルタは、大いなる希望を抱きて」。

3）［訳注］皇帝ハインリヒ（ヘンリク）五世のポーランド遠征について、マレチンスキは次のように描いている。ヘンリクは、一一〇九年八月一日、ほぼ一万騎の騎士を率いてエルフルトを発ち、古いドイツの街道に沿ってクロスノに向う。その遠征に加わった者は、ザクセン、ババリア、フランコニア、ライン、ロタールの騎士であり、またチェコ公シフイエントポウクも途中から加わった。ヘンリクのこの東征の目的は、法王パスカリス二世に対して、外征における勝利を示して、ローマでの自らのローマ皇帝としての戴冠を優利に運ぶという点にあった。しかしその目論見は大きな壁につきあたった。ヘンリクに対してボレスワフは、八月十日にナクウォの戦でポモジェ人を完膚なきまでに打ち破った後、ただちに兵三千を率いてオドラ川に急行し、ヘンリクの軍勢と対峙した。ヘンリクは、ヴィエルコポルスカの森と沼地の案内役であったチェコ公シフィエントポウクの軍の遅れのため、八月の半までクロスノに滞在し、ようやく八月二四日にビトムを通ってグローグフの城を攻囲した。しかし、ボレスワフの軍勢の鋭い攻撃と九月二十一日に生じたシフィエントポウクの突然の死、九月の寒さと打ち続く悪天候のために、ヴロツワフを横に見て、リチンという所で軍の向きを変え、ドイツへと帰っていった。ヘンリクは結局ズビグニエフとボレスワフ・クシヴウスティによるポーランド分割の計画を取り下げ、シフィエントポウクの後のチェコ

公の地位を、クシヴウスティと友好関係にあるボジヴォイに与えた。またボレスワフ・クシヴウスティに要求していた貢納に関しては、クシヴウスティが新たなる領土としてポモジェを服征すれば、そのポモジェだけから貢納を求めるという条件でクシヴウスティと合意した。Maleczyński, *Bolesław Krzywousty* p. 66-73.
また『コスマの年代記』第三巻第二七章にこの遠征が次のように描かれている。"Eodem anno excellentissimus rex Heinricus, memor irae suae et indignationis contra ducem Poloniae nomine Bolezlaum, memor pollicitationis quam pollicitus erat compatri suo Zuatopluc iuxta urbem Possen, uti supra retulimus, iter agens per Saxoniam, duxit secum Bawaros simul et Alamanmos atque Francos orientales, et eos qui sunt circa Renum infra Agripinam Coloniam usque ad occidentales sui imperii terminos ; nec defuerunt Saxones saxis rigidiores cum longis hastis. Quibus etiam Boemiis adiunctis mense septembri intrat Poloniam, et circa primum eius oppidum Glogov disposita obsidione, devastat eam ex utraque parte fluminis Odrae, a praedicto oppido usque ad castrum Recen, et iterum cum magna praeda reversus est ad castra."「同じ年、卓越した王ヘンリクは、ボレスワフという名のポーランド公に対する自分の激しい怒りを覚えていて、また同盟者シフィエントポウクに約束した事柄を想起して、前に述べたように、サクソニアを通過して、ポズナニの城塞まで兵を進めた。ヘンリクの軍勢は、ババリア人、アレマン人、東部フランク人、また、コロニア・アグリッパ近傍のラインから帝国の西の境にいたるまでの地域の人々を含むものであった。また長槍をもつ、岩より強固なサクソニア人も欠けていなかった。さらに彼らにチェコ人が加わって、九月に入ってポーランドに攻め入り、ポーランド人の最初の城塞グローグフを包囲し、オドラ川の両岸を、このグローグフからリチンの城塞までの土地を荒廃させ、多くの戦利品を獲得して、自分の陣に帰った。」

4) ［P］今日のジェロナグーラ県のビトム（下シロンスク地方の）。

5) ［P］"impetus Alamannorum"「アレマン人の突撃」—— 戦におけるドイツ人の勇猛で執拗な闘いぶりは、中世においてよく知られていた。

6) ［M］Justin, I. 8-6. "veluti ad epulas non ad prelium venisset." ユスティヌス第一巻八—六「戦いではなく、まるで宴会に赴いたように」。

7) ［P］"draco flammivomus"「火を吐く龍」—— ボレスワフ・クシヴウスティ。第二巻第三九章参照。

## 第四章

二六九

さて、疲れを知らぬボレスワフは、先に述べたポモジェの戦に勝利して、七つの砦を手に入れたが[1]、皇帝がポーランドに攻め入ったという確かな知らせを耳にした。しかし、人も馬も長い包囲戦で疲れ、ある者は倒れ、ある者は傷つき、また他の者は傷ついた者とともに国に帰った。しかしボレスワフ

は戦うことのできる者を率いて突き進み、オドラ川[2]の渡河地点と浅瀬にあらゆる方法で防柵をほどこすように命じた。川の流れが乾いて渡ることが可能となった所とか、またおそらくひそかに住民が渡ろうとする場所はどこも、このようにして防柵がほどこされた。さらにボレスワフは勇敢な騎士の一隊をグローグフへと派遣し[3]、渡河地点を監視させが、彼らは、ボレスワフが川岸に到着して、皇帝の軍に対して全面的に勝利を収めるまで抵抗するか、あるいは少くとも皇帝の軍を引き止めて援軍と助け手が到着するまで、皇帝の軍に抗戦する、という役割を荷うこととなった。他方、ボレスワフは、少数の軍勢を率いてグローグフから遠くないところに陣営を置いたが、それは不思議なことではなかった。というのは、すでに非常に長い間、自分の兵士達を疲れさせていたからである。その地でボレスワフは、風聞を集め、使者の報告を聞いた。またその地で自分の軍勢の到着を待ち、その地から各地に斥候を派遣し、配下の役人を自分の国やルテニアやパンノニアへ送った[4]。

## (4)

Igitur inpiger Bolezlauus in Pomorania superato prelio supradicto, ⁝ septemque castellis acquisitis, audito pro certo, ⁝ quod cesar Poloniam introisset, viris et equis obsessione diutina fatigatis, ⁝ quibusdam militum interemptis, ⁝ quibusdam etiam sauciatis, ⁝ aliisque domum cum eis dimissis, ⁝ cum quibus potuit equitavit ⁝ et obstruere transitus et vada fluminis Odre modis omnibus commendavit. ⁝ Obstrusa sunt itaque loca quecumque poterant vel sicco flumine transvadari, ⁝ vel si que poterant ab ipsis incolis occulta forsitan attemptari. ⁝ Quosdam etiam probos milites ad Glogow et ad fluminis transitus observandos premisit, qui cesari tam diu resisterent, ⁝ donec ipso succurrente super ripam fluminis aut omnino victoriam obtinerent, aut saltim, eum ibi detinendo, exercitum et auxilium expectarent. ⁝ Ibi vero Bolezlauus, non longe remotus a Glogow, cum exercitu parvo stabat, ⁝ neque mirum, quia suos diutissime fatigarat. ⁝ Ibi rumores et legationes audiebat, ⁝ ibi suum exercitum expectabat, ⁝ inde exploratores huc illucque transmittebat, ⁝ inde camerarios pro suis et pro Ruthenis et Pannonicis delegabat. ⁝

二六八

1）［M］一一〇九年八月十日ごろ、ポモジェ人に対する戦で勝利を収め、八月十五日ごろ、ナクウォ以外の六つの砦を占領した。そこからビトムの土地へのボレスワフの行軍には、まったく援軍はなかったと思われる。
2）［M］シロンスク地方を流れるオドラ川。
3）［M］オドラ川に沿ったグローグフの砦。
4）［訳注］ボレスワフ・クシヴウスティが要請したルテニアとハンガリアの援軍について、年代記作者は以下の文章では全く言及していない。この点については研究史上、見解が分れていて、グロデツキ、ザグジェフスキは援軍の存在を主張しているが、マレチンスキは否定している。Grodecki, *Dzieje Polski* I, p. 117, Zakrzewski, "*Okres do schyłku XII* w. p. 87.

# 第五章

さて、兵を進めていた皇帝は、川の浅瀬を探るために上流や下流に進路を転ずるのではなく、グローグフの町に近い、誰も予想もしなかった場所を通って、一挙に川を押し渡った[1]。誰も以前にはそこを渡河地点だと予想していなかったので[2]、皇帝の軍勢は、一人の抗戦にも会わず、密集隊列を組み、武器を手にしたまま川を渡ったのである。グローグフの町の人々は全く備えがなく、城内の者でこの場所について怪しむ者もなく、疑いの念すら抱く者もなかった。

皇帝が川を渡ったのは、使徒聖バルトロメオの祭日であった[3]。その時、町のすべての人々は、聖ミサの儀式に耳を傾けていた。それゆえ、皇帝が安全に、何の困難もなく川を押し渡り、多くの戦利品と捕虜を略奪し、さらに城塞の近くにあった天幕を手に入れることができたのも当然のことであろう。また城を守るために集まってきた者や、城の外の天幕に居残っていた者の多くは、皇帝によって城内に入ることを妨げられ、捕えられて、ある者は逃亡に救いを求め、自由になった[4]。逃げ失せた者のうちの一人がボレスワフに遭遇し、起ったすべての事柄を告げた。その時ボレスワフは、不安に戦く兎のようにすごすごと消え失せるのではなく、勇敢な騎士として自分の兵士を励ました。「おお、強壮な騎士達よ、汝らは我とともに闘った戦と出征でさぞ困憊していることであろう。しかし今一度、ポーランドの自由のために生死を賭してくれたまえ[5]。もし彼の地グローグフで私が死んだとしても、それで祖

国の危難を終わらせることができると確信できるならば、このわずかな手勢を率いて喜んで皇帝との戦に向おうと思う。しかし、我等の兵士の一人は、敵の百人以上に当たることになるから、慢心して彼の地に赴き、そこで倒れるよりも、この地に残って抗戦した方がむしろ名誉なことではあるまいか。我等がここに残って、敵の通過を妨げるならば、すでにそれだけでも十分に勝利と見做されるであろう。」こう言って、切り倒された木材で、側を流れる小川に防塞を築きはじめた。

## (5)

Cesar autem iter faciens, non sursum sive deorsum vada temptando declinavit, ⁝ sed iuxta civitatem Glogow cum impetu per locum inestimabilem, nullo prius ibi transitum presciente, ⁝ nulloque sibi resistente, ⁝ cum densis agminibus ⁝ et armatis, non preparatis civibus, ⁝ transvadavit, ⁝ per illum locum numquam castellanis dubitantibus nec sperantibus dubitandum. Erat enim sancti Bartholomei apostoli dies festus, quando cesar fluvium transiebat ⁝ et tunc totus civitatis populus divinum officium audiebat. ⁝ Unde constat, quia securus et sine periculo pertransivit, ⁝ predamque multam et homines et etiam tentoria circa oppidum acquisivit. ⁝ Eorum quoque plurimi, qui castrum defendere venerant ⁝ et extra castrum in tentoriis residebant, ⁝ a cesare castrum sunt intrare prohibiti, ⁝ quidam ibi subito retenti, ⁝ quidam vero fuga subveniente liberati. ⁝ Quorum unus Bolezlauo fugiens obviavit, ⁝ qui cuncta, que contigerant, enarravit. ⁝ Tunc vero Bolezlauus non sicut lepus formidolosus evanuit, ⁝ sed suos sicut miles animosus ammonuit. ⁝ O fortissimi milites, inquiens, in multis mecum bellis et expedicionibus fagitati, ⁝ nunc quoque mecum estote pro libertate Polonie vel mori vel vivere preparati. ⁝ Ego quidem iam cum tam parva manu prelium libens contra cesarem inirem, ⁝ si scirem pro certo, quod etiam ibi me moriente discrimen patrie diffinirem. ⁝ Sed quoniam ad unum de nostris restant de hostibus plus quam centum, ⁝ hic est honestius residendum, ⁝ quam illuc cum paucis eundo presumptuose moriendum. ⁝ Hic enim nobis residentibus, ⁝ eisque transitum prohibentibus, ⁝ satis pro victoria reputabitur. Hec dixit ⁝ et rivulum, super quem stabat, arboribus cesis

obstruere cepit. ⁝

1）［訳注］『コスマの年代記』第三巻第二七章の記述（『ガル年代記』第三巻第三章の注（3）［訳注］を参照）。
2）［訳注］グンプロヴィッチによれば、この浅瀬の箇所は、ズビグニエフ派のポーランド人によってドイツ人に漏らされた。Gunplowicz, *Zur Gesch. Polens*. p. 77.
3）［M］一一〇九年八月二四日。
4）［M］この叙述は、ボレスワフによって派兵され、城内に入ることができなかった援軍を示唆しているように思われる。
5）［M］I Macchabeorum. 4-35. "parati sunt aut vivere aut mori fortiter ……"『マカバイ記一』四一三五「生きるにせよ、死ぬにせよ、雄々しくふるまう覚悟」。

# 第六章

その間、皇帝はグローグフの人々に、以下の条件を誓約して、彼らから人質を取った。すなわち五日の間に、町の人々がボレスワフの下に使者を送って和平かなんらかの協定を提起し、返答がもどってきた時には、和平の締結の成否にかかわらず、町の人々は自分の人質を取り戻すことができる、というものであった。このことは策略としてなされたことである[1]。すなわち、これによって皇帝は、誓約の下に人質を取ったのであるが、どちらにしても偽りの誓約をして町を接収することができると考えたからである。他方、グローグフの町の人々は、これによって、しばしの間、老朽のために崩れた城壁の箇所を補修することができると考えて、人質を差し出した。

## (6)

二六五 Interim vero cesar a Glogouiensibus obsides tali condicione sub iureiurando recepit, quod si pacem vel aliquam paccionem infra spatium quinque dierum missa legacione cives efficerent, ⁝ reddita responsione vel pace composita ⁝ vel prohibita, ⁝ cives tamen suos obsides rehaberent. ⁝ Et hoc utique per ingenium factum fuit. ⁝ Ob hoc utique cesar obsides cum iuramento recepit, ⁝ quia per eos civitatem, licet cum periurio, consequi se reputavit. ⁝ Ob hoc etiam Glogouienses illos obsides posuerunt, ⁝ quia loca

civitatis interim vetustate consumpta munierunt. ⁝

1）［訳注］マレチンスキによれば、この叙述は信憑性を欠くものである。なお、これと同じような協定についてはすでに第三巻の第一章に言及されている。

# 第七章

しかしながらボレスワフは、使者からグローグフの町の人々が人質を差し出したことを聞いて激怒し、もし人質のために城を引き渡すならば、磔の刑にかけると町の人々に迫り、加えてこう言った。「町の人々もその人質も、降伏して不名誉な命をあがない、さらに異国の部族に奉仕することになるよりも、祖国のために剣を取って倒れた方が、立派で名誉なことである。」

町の人々は、このような返答を受けて、ボレスワフはこのような条件では和平を結ぶつもりはないと皇帝に告げ、約束に従って人質を返還するように要請した。これに対して皇帝は言った。「もし汝らが城を引き渡すならば、人質を拘留しないだろう。だがもし汝らが私に手向かうならば、汝らも人質も斬り殺すことになろう。」これに対して城内の人々は答えた。「もちろん汝は、誓約を破って人質を殺すこともできるであろう。しかしそうすれば、汝は、望んだものを決して手に入れることができなくなることを知るであろう。」

## (7)

At Bolezlauus audita legacione de datis obsidibus indignatus, ⁝ crucem civibus, si propter ipsos castrum reddiderint, est minatus, ⁝ adiciens esse melius et honestius et cives et obsides gladio pro patria morituros, ⁝ quam facta dedicione vitam inhonestam redimentes, alienis gentibus servituros. ⁝ Recepta responsione, cives Bolezlauum pacem sic fieri nolle referunt, ⁝ obsidesque suos, sicut iuraverant, requirunt. ⁝ Ad hec cesar respondit : obsides quidem, si mihi castrum reddideritis, non tenebo, ⁝ sed si rebelles fueritis, ⁝ et vos et obsides iugulabo. ⁝ E contra castellani. tu quidem in obsidibus et periurium poteris et homicidium perpetrare, ⁝ sed per ipsos, quod requiris, scias te nullatenus impetrare. ⁝

# 第八章

これらの言葉を聞くと、皇帝は、「城攻めの道具を作れ、武器を取れ、隊を整えよ、柵で城を取り囲め、旗手にラッパを吹かせよ。」と命じ、鉄と火と城攻めの道具によって、あらゆる方面から町を攻めはじめた。それに対して、町の人々も、城門と櫓の下にそれぞれに分れて集まり、堡塁を補強し、護りの道具を整え、石と水を城門と櫓の上に運ぶ。その時、皇帝は町の人々の気概を、彼らの息子達や友人達への愛情によって挫くことができると思って、町の人々の人質の中から氏素姓の立派な者と伯の息子達とを[1]、城攻めの櫓の上に縛りつけるように命じた[2]。皇帝は、そうすれば流血なしに町の門が開くだろうと思ったからである。しかし城の人々は、自分の息子や縁者に対しても、ボヘミア人やドイツ人に対する以上には心に懸けず、彼らを石や武器によって城壁から退かせたのである。そこで皇帝は、このような策によっては町を占領することはできないと考え、また謀によっては市民の決意を翻させることはできないと悟り、策略で達成できなかったものを武力によって手に入れようとした。そこであらゆる方向から城に突撃が加えられた。双方の陣から大きな喚声が上った。ドイツ人は城を攻め、ポーランド人はそれを守る。いたるところで投石機が巨石を投げ飛ばし、弩弓が騒しく音をたて、投げ槍や矢が空中を飛びかう。

楯に穴が穿たれ、
胸あてが突き破られ、
兜が破け散り[3]、

二六三 死んだ兵士が倒れ、傷ついた者が退き、その場所に新手が立ち現われる。ドイツ人が鉄の弩を巻くと、ポーランド人は弩に加えて投石機を巻き上げる。ドイツ人が矢を放つと、ポーランド人は矢とともに投げ槍を投げる。ドイツ人は弩を、ポーランド人は杭の付いた石うすを巻き上げる。ドイツ人が丸太を覆いにして城壁に近づこうとすると、ポーランド人は燃え上った薪や煮えたぎった湯を彼らに浴びせる。ドイツ人が塔の下で鉄の破城槌を打ちおろそ

うとすると、ポーランド人は星状の鉄輪を上から繰り出す。ドイツ人が高くのばした梯子で上に登っていくと、ポーランド人は鉄の鉤で彼らを引っかけて空中に持ち上げる(4)。

## (8)

Hiis dictis cesar instrumenta fieri, ⁝ arma capi, ⁝ legiones dividi, ⁝ civitatem vallari, ⁝ signiferos (prefici), ⁝ tubis canere precepit ⁝ et urbem undique ferro flamma, machinis expugnare cepit. ⁝ E contra cives se ipsos per portas et turres dividunt, ⁝ propugnacula muniunt, ⁝ instrumenta parant, ⁝ lapides et aquam super portas et turres comportant. ⁝ § Tunc imperator civium animos pietate filiorum et amicorum existimans posse flecti, ⁝ precepit nobiliores ex obsidibus ipsius civitatis (et) filium comitis super machinas colligari, ⁝ sic reputans sibi sine sanguine civitatem aperiri. ⁝ § At castellani non plus filiis vel propinquis, ⁝ quam Bohemis vel Alemannis ⁝ parcebant, ⁝ sed eos abscedere a muro lapidibus et armis coercebant ⁝ Videns autem imperator, quod tali numquam ingenio civitatem superaret, ⁝ nec umquam a proposito civium animos revocaret, ⁝ viribus et armis obtinere nititur, quod ingenio denegatur. ⁝ § Igitur undique castrum appetitur ⁝ et utrimque clamor ingens attollitur. ⁝ Teutunici castrum inpetunt, ⁝ Poloni se defendunt, ⁝ undique tormenta moles emittunt, ⁝ baliste crepant, ⁝ iacula, sagitte per aera volant, ⁝

Clipei perforantur,
Lorice penetrantur,
Galee conquassantur,

mortui corruunt, ⁝ vulnerati cedunt, ⁝ eorum loco sani succedunt. ⁝ Theutonici balistas intorquebant, Poloni tormenta cum balistis ; ⁝ Theutonici sagittas, Poloni iacula cum sagittis ; ⁝ Theutonici fundas cum lapidibus rotabant, ⁝ Poloni lapides molares cum sudibus preacutis ; ⁝ § Theutonici trabibus protecti murum subire temptabant, ⁝ Poloni vero ignem comburentem ⁝ aquamque ferventem ⁝ illis pro balneo temperabant. ⁝ Theutonici arietes ferreos turribus subducebant, ⁝ Poloni

vero rotas calibe stellatas desuper evolvebant. ⁝ Theutonici scalis erectis superius ascendebant, ⁝ Poloni vero uncis affixos ferreis eos in aera suspendebant. ⁝

1）［M］このグローグフの伯（カシテラン＝城代）が一〇九三年にこの城を所有していたヴォイスワフであるのか、あるいは一一二四年に我々が知るところの（『コスマの年代記』第三巻第五六章）別のヴォイスワフであるのか、その点は不明である。
2）［P］ほぼ八百年後、一九四四年のワルシャワ蜂起の時、ドイツ軍は、戦車への火焔攻撃を防ぐために、戦車の前に市民達を立たせ、ポーランドのバリケードへと追い立てた時、同じような方法を用いたのである。
3）［M］それぞれ六音節の三連のトロカイックの詩。
4）［訳注］この城攻めの叙述に関して、マレチンスキは、年代記作者が『ユグルタ戦記』第五七章を模したものだとする見解を紹介しているが、プレジアはそれに反対している。プレジアは、この叙述様式そのものが極めて修辞的であり、図式的であることからこの章は城攻めの「理念的」な描写であるとしている。

## 第九章

その間、ボレスワフは昼も夜も休まず、ある時は、食糧を求めて陣営から出た者を追いたて、またしばしば皇帝自身の陣を恐怖に陥れ、ここかしこと略奪者と放火者を待ち伏せして追い回した。

こうして皇帝は、多くの日々を費して町を占領しようと試みたが、日々味方の兵士達の新鮮な肉以外には何も戦果を得ることができなかった。というのは、その地では毎日高貴な身分の男達が討ち倒され、内臓を抜き取られて、塩や香料で整えられ、ポーランドからの貢献として馬車に積まれ、皇帝によって、バヴァリアかサクソニアへ送られたからである。

二六一

(9)

Interea Bolezlauus die noctuque non cessabat, ⁝ sed quandoque de castris exeuntes pro victualibus agitabat, ⁝ frequenter etiam ipsius castra cesaris territabat, ⁝ modo huc modo illuc predatoribus vel combustoribus insidiando cursitabat. ⁝ Talibus ergo modis cesar multisque diebus civitatem capere nitebatur, ⁝ nec aliud quam carnem humanam suorum

cottidie recentem lucrabatur. ⁝ § Cottidie namque viri nobiles ibi perimebantur, ⁝ qui visceribus extractis sale vel aromatibus conditi ⁝ in Bauariam ab imperatore vel in Saxoniam portandi, ⁝ pro tributo Polonie curribus onustis servabantur. ⁝

# 第十章

皇帝は、武器によっても、脅迫によっても、贈与によっても、約束によっても、町の人々の心を変えることはできないと悟り、また、そこに長く留まっても何も得ることはできないと思って、軍議を開き、ヴロツワフの都市の方へと陣を移した[1]。しかしながら、そこでも皇帝はボレスワフの武力と才能を認めることになった。というのは、皇帝がどこに赴こうとも、またどこで陣を張り、軍勢を野営させても、ボレスワフは、時には前方から、時には後方から皇帝を追い、常に皇帝の野営地の近くに留まっていたからである。皇帝が行軍のために陣を撤収しようとすると、ボレスワフもまたその行軍の友となった[2]。そして誰でも隊列から離れれば、ただちに陣に帰る道を見失った。また多くの者が、食糧や馬の飼料を求め、多数を恃んで[3]、陣営から遠く進み出た時には[4]、ボレスワフはただちに彼らと本隊との真中に割って入り、戦利品を求めた者が逆にボレスワフの戦利品となった。ボレスワフは、このようにしてこれ程に多数の軍勢を、これ程の恐怖に陥れたので、生れながらの略奪者であるボヘミア人も、自分自身の蓄えを食べねばならず、また飢えを味わわねばならなかった。実際、敢えて陣営から外に出ようと思う者はいなかった。従者も誰一人草を集めようとせず、番兵ですら、肉の臓腑を洗うために、決められた隊列を越え出ようとするものはいなかった。昼も夜もボレスワフは恐れられ、ボレスワフは誰からもその名を憶えられた。ボレスワフは「眠らない者」と呼ばれた。小さな森や茂みがあれば、「注意しろ！そこに潜んでいるぞ！」と彼らは叫んだ。ボレスワフがいないと思われるような場所はなかった。

こうしてボレスワフは、狼が人を引きさらっていくように[5]、ある時は先頭から、またある時は後尾から、またある時は側面から攻撃を加えて、彼らを

不断に疲れさせた。それゆえ騎士達は、毎日武具に身を固めて進み、いつもボレスワフの出現を懸念した。夜もまた全員が鎖帷を纏って眠り、ある者は陣営の中に留り、ある者は徹夜の番に立ち、またある者は、夜中、陣営を巡回した。ある者は「徹夜で見張れ！用心せよ！警戒せよ！[6]」と呼んだ。ある者は次のような言葉でボレスワフの武勇を歌った。

## (10)

Cumque vidisset cesar, quia nec armis, nec minis, ⁝ nec muneribus, nec promissis ⁝ cives flectere, ⁝ neque diucius ibi stando quicquam proficere ⁝ potuisset, inito consilio contra Wratislauiensem urbem castra movit, ⁝ ubi quoque vires Bolezlai et ingenium recognovit. ⁝ Nam quocumque cesar se vertabat, ⁝ vel ubicumque castra vel stationes faciebat, ⁝ Bolezlauus quoque quandoque (anterius, quandoque) posterius incedebat, ⁝ semperque vicinus stacioni cesaris persistebat. ⁝ § Cumque cesar iter faciens sua castra dimovebat, ⁝ Bolezlauus quoque comes itineris existebat, ⁝ et si quisquam de ordinibus exiebat, ⁝ redeundi statim memoriam amittebat ⁝ § et si quandoque plures, victualia vel pabulum equorum querentes, freti multtudine longius a castris procedebant, ⁝ inter eos et exercitum Bolezlauus se statim medium opponebat ⁝ et sic predam capientes ipsi quoque Bolezlaui preda fiebant. ⁝ § Unde tantum ac talem exercitum ad tantum pavorem redegerat, ⁝ quod etiam ipsos Bohemos, naturaliter raptores, vel sua manducare, vel ieiunare coegerat. ⁝ § Nullus enim exire de castris audebat, ⁝ nullus armiger herbam colligere, ⁝ nullus etiam ad ventrem purgandum ire ultra constitutas custodum acies presumebat. ⁝ Die noctuque Bolezlauus timebatur, ⁝ ab omnibus in memoria habebatur : ⁝ Bolezlauus non dormiens vocabatur. ⁝ Si silvula, si frutectum erat, ⁝ Cave tibi, ibi latitat, ⁝ clamabatur. ⁝ Non erat locus, ⁝ ubi non putaretur Bolezlauus. ⁝ Taliter eos assidue fatigabat, ⁝ quandoque de capite, quandoque de cauda sicut lupus aliquos rapiebat, ⁝ quandoque vero a lateribus insistebat. ⁝ Sicque milites armati cottidie procedebant ⁝ et assidue Bolezlauum quasi presentem expectabant. ⁝ In nocte quoque cuncti loricati dormiebant, ⁝ vel in stationibus residebant, ⁝ alii vigilias faciebant, ⁝ alii castra nocte continua circuibant, ⁝ alii : vigilate, cavete, custodite,

二五九

clamabant, ⁝ alii cantilenas de Bolezlaui probibate decantabant, ⁝ hoc modo.

1）［M］『コスマの年代記』第三巻第二十七章は、事態を別様に描いている。すなわち、皇帝は、グローグフの近郊の地を去って、シロンクス地方のリチンという砦の近くを破壊した、と。
2）［M］Psalm, 79(80)-10. "dux itineris fuisti"『詩編』八〇―一〇「あなたは軍を導く公であった。」
3）［M］Sallust, *Bellum Iugurthinum* "tamen fretus multitudine militum parabat armis contendere." サルスティウス『ユグルタ戦記』一三―三「兵の数の多さを恃んで、戦を始めた。」
4）［M］Sallust, *Bellum Catilinae*, 61-8. "qui e castris visundi aut spoliandi gratia processerant." サルスティウス『カティリナ戦記』六一―八「視察したり、略奪したりするために陣営を出たものは」。
5）［M］Secundum Iohammem, 10-12." Mercennarius fugit....lupus rapit et dispergit."『ヨハネによる福音書』一〇―一二「雇い人は逃げる。狼は羊を奪い、また追い散らす。」
6）［M］Liber Ezrae, 8-29. "vigilate et custodite donec."『エズラ記』八―二九「よく注意して預って下さい。」

# 第十一章

ボレスワフ、ボレスワフ、栄光の公よ、
熱き心もて己の国を守る者よ、
汝は眠らず、また我等を一時も眠らせず、
昼も夜も、また明方も。

我等、汝を国から追い払わんと企てしが、
汝こそ我等を牢に閉じ込める如く捕えたり。
寡を率いて大軍を懲しめうる侯こそ
王土を治めるにふさわしき者。

もし汝が一時に全軍を率いたれば、我等、何如になりたらん。
帝すらなお汝に抗することあたわず、

少なき兵もて、かくの如き大軍を討ち破りたる者にこそ
王国や帝国を奉るべし。

ボレスワフ、ポモジャより帰りて早々に、
いまだ十全の備えなきままに、
我等の慢心を打ち砕きたり。
凱旋の祝いの席に彼の公を迎えねばならぬに、
我等、彼の公の御国を攻め取らんとす。

彼の公こそ、神に許されし戦を異教の徒と戦いしが、
我等はキリストの信徒に許されざる剣を振う。
神、それゆえに彼とともにありて、彼に勝利を賜わり、
また我等には、正しくも我等が犯した不義ゆえに罰を下したまう[1]。

(11)

Bolezlaue, Bolezlaue dux gloriosissime,
Tu defendis terram tuam quam studiosissime.

Tu non dormis, nec permittis nos dormire paululum,
Nec per diem, nec per noctem, neque per diluculum.

Et cum nos te putaremus de terra propellere,
Tu nos tenes ita quasi conclusos in carcere.
Talis princeps debet regnum atque terram regere,
Qui cum paucis tot et tantos ita scit corrigere.

二五七 Quid, si forte suos omnes simul congregaverit,
Numquam cesar sibi bello resistere poterit.
Talem virum condeceret regnum et imperium,
Qui cum paucis sic domabat tot catervas hostium.

Et cum nondum recreatus sit de Pomorania,

Sic per eum fatigatur nostra contumatia.
Et cum illi cum triumpho sit eundum obviam,
Nos e contra cogitamus expugnare patriam.

Ipse quidem cum paganis bella gerit licita,
Sed nos contra christianos gerimus illicita.
Unde Deus est cum eo faciens victoriam,
Nobis vero iuste reddit illatam iniuriam.

1）［M］それぞれの連が十五音節の二十連のトロカイックの詩。

# 第十二章

さて、身分が高く、分別のある若干の人々が、これを聞いて驚き、互いに語りあった。「もしも神がこの人物を助けようと思われないなら、異教の徒に対するこれ程大きな勝利を彼に与えたまわないであろう。また彼がこれ程大胆に我等に抵抗することもないであろう。またもし神が彼をこれ程力強く引き上げたまうことがなければ、我が国の民衆がこれ程彼を誉め称えることもないであろう。」

しかしながら神は、おそらく秘かに取り計らって、皇帝の名声をボレスワフの上に移されたのである。事実、民衆の声が常に主なる神の声に一致することは習わしとなっていることである。それゆえ、歌を歌っている民衆が神の意志に従っていることは明らかである。しかし、皇帝には民衆のこの歌が快くはなかった。それゆえ、この歌を民衆が歌うのを幾度も禁じた。しかしそうすればそうする程かえって民衆は、さらに向こう見ずな振舞に駆りたてられた。そこで皇帝は、実例と行いを省みて、無益な努力によって民衆を疲れさせたこと、また神の意志にはさからえなかったこと[1]を悟り、秘かに別のことを思案した。しかしまたそれとは異なる事柄を遂行しようとするふりをしたのである。皇帝は、これ程多くの民衆は、戦利品なしにはこれ以上長くここに留まることはできないこと、またボレスワフが吼えるライオンの如く[2]、不断に彼らを取り囲んでいることを熟考した。馬も倒れ、人も徹夜の監視と

二五六

労苦、飢餓に苛まれ、うっそうとした森、まとわりつく沼地、肌刺す蝿、鋭くとがった矢、憎みに満ちた農民、これらのものが皇帝の企ての成就を許さなかった。そこで皇帝は、クラコフへ行くと偽って、和平のために使者をボレスワフのもとへ巡遣し、以下の言葉で金銭を求めた。しかしそれは、以前程の額ではなく、また以前程の傲慢な調子でもなかった。

## (12)

Quidam vero viri nobiles et discreti hec audientes, ⁝ mirabantur inter se referentes. ⁝ Nisi Deus hunc hominem adiuvaret, ⁝ nunquam tantam de paganis victoriam ei daret, ⁝ neque nobis ita viriliter contra staret. ⁝ Et ni Deus eum ita potencialiter exaltaret, ⁝ numquam eum noster populus sic laudaret. ⁝ Sed Deus secreto forsan consilio hec agebat, ⁝ qui laudes cesaris ad Bolezlaum transferebat. ⁝ Vox enim populi semper solet voci dominice convenire. ⁝ Unde constat Dei voluntati populum cantantem obedire. § Cesari vero cantilena populi displicebat, ⁝ eamque cantari sepissime prohibebat, ⁝ sed eo magis ad tantam procacitatem populum prorsus commovebat. ⁝ Cesar vero exemplis et operibus recognoscens, quia frustra laborando populum affligebat, ⁝ nec divine voluntati resistere valebat, ⁝ aliud secrecius cogitavit ⁝ et aliud se facturum simulavit. ⁝ § Perpendebat utique, quia tantus populus sine preda diucius vivere nequibat ⁝ et quia Bolezlauus eos assidue, sicut leo rugiens circuibat. ⁝ Equi moriebantur, ⁝ viri vigiliis, labore, fame cruciabantur, ⁝ silve condense, ⁝ paludes tenaces, ⁝ musce pungentes, sagitte acute, ⁝ rustici mordaces ⁝ compleri propositum non sinebant ⁝ Unde se Cracow simulans ire velle, ⁝ legatos de pace Bolezlauo misit et pecuniam non tantam, nec tam superbe, ⁝ sicut prius quesierat, in hec verba.

一五五

1) [M] Hester. 13-9. "Domine, non est, qui possit tuae resistere voluntati." 『エステル記』十三―九「主よ、あなたの意志に逆らう者はいません。」(これは現行の『合同訳聖書』には存在しない文章である。)

2) [M] Epistula Petri I. 5-8. "tamquam leo rugiens circuit." 『ペトロの手紙一』五―一二「ほえたけるライオンのように、探し回っています。」